

今も、昔も、これからも

中 三

今、世界がある感染症と闘っている。「新型コロナウイルス感染症」だ。世界中で猛威を振るい、たくさんの人が命を落としている。日に日に感染者が増えていく様子を、世の中は「いつ感染するか分からない」という恐怖と、「いつ終わるか分からない」という不安で包まれている。

そんな中、私はあるニュースを目にした。インターネット上で感染に関わる情報が拡散されたり、うわさに尾ひれがついて広まったり、「デマ」による風評被害や差別が問題になったりしている、というものだ。

なぜこんなことが起こってしまうのか。一緒にニュースを見ていた母に聞いてみると、「感染することへの恐怖とか不安をどうにか排除したくて、不確かな情報をうのみにしてしまいうからじゃないかな。」

今、インターネット上に情報があふれている

時代だ。私も、一つ一つの情報が正しいかどうかを確認しなければならぬ、と何度も教えられてきた。しかし、一つ一つ確かめるのはふだんでも難しいのに、みんながおびえている状況では、さらに難しいだろう。デマが流れて、混乱が起きたり、差別されたりするのは避けられないことなのかもしれないと思った。

ここで私は、二つ気になったことがある。今はインターネット上に情報があふれている時代だが、そうでなかった時代に流行した感染症でも、同じようなことが起こったのだろうかということ。だとすれば、どのようにうわさやデマは広がり、風評被害や差別につながったのだろうかということである。

私はこの二つの疑問を確かめるべく、「ハンセン病」という病について調べた。

もともとハンセン病について全く知らなかったわけではないが、感染すると体の一部が変形してしまう病気というイメージしかなかった。しかし、深く調べていくうちに、私がついていたイメージも、もしかしたら差別につながっていたのかもしれない、と私は恐怖することとなった。

私の一つの目の疑問の答えは、調べてすぐに分かった。ハンセン病の歴史は、想像を絶するほど長く、残酷な差別の歴史だったのだ。

ハンセン病は、「らい菌」と呼ばれる細菌に感染することで起こる。感染し、発症すると主に皮膚に病的な変化が起きる。らい菌は感染力がとても弱く、感染しても発症することはまれで、現在は薬で完治させることができる。だが、早期に適切な治療を行わないと、手足の感覚がなくなったり、体の一部が変形したりするなどの後遺症が残ることもある。

私は、ここまで調べてみて、「感染しにくいのに、なぜ差別されなくてはいけなかったのか。」と思った。その答えは、私に恐怖心を与えると同時に、私のもつ二つの疑問の根本的な勘違いに気付くきっかけとなる、思いもよらないものだった。

ハンセン病はかつて不治の病とされ、コレラやペストなどと同じように恐ろしい伝染病で、隔離以外の感染防止策はないと考えられていた。さらに、後遺症が残った患者の外見に対する偏見や差別心も伴って、世界中の国々や地域に患者を収容

し隔離する療養所が作られてきたのだった。

そう、私が恐怖した理由とは、私が最初にもっていたイメージが後遺症による“外見”のことで、ハンセン病が流行した当時、患者に対して世間がもっていた偏見と全く同じだったことだ。もし私がその時代に生きていたら、差別する側になっていたのかもしれないと思うと、怖くなってくる。

そして私は、勘違いに気付く。ハンセン病の差別を生んだ原因は、うわさでも、デマでもなかった。みんなが病気を怖がるだけで、誰も正しく知ろうとしなかったことだ。ハンセン病に関して、無知であったことだったのだ。

しかしそれは、今の時代に生きる私たちも同じなのではないだろうか。ハンセン病は、まだ根絶していない。世界では患者が今も、増え続けている。今後、より多くの人がハンセン病に対してよく理解していく必要がある。

ハンセン病の歴史から学んだことを、決して忘れてはいけない。感染症による差別で苦しむ人を生まないために、今、私たちにできることは、やはり正しく知ることだろう。昔と違う、情報が簡

単に手に入る時代だからこそ難しい、「正しく」
知ること。これができれば、少しずつでも、差別
は減っていくだろう。

感染症の歴史は、繰り返すと言われている。止
めるには、お金や薬など、多くの物が必要だ。し
かし、差別の歴史はどうだろうか。たとえ繰り返
してしまっても、少しの想像力を使って相手を思
うだけで、止められるだろう。

お金も、薬も必要ない。

それはきつと、今も、昔も、そしてこれから
も、同じだ。